

MEJ 4060

国語問題問答

第 2 集

国語シリーズ

19

文 部 省

刊 行 の 趣 旨

国語シリーズは、国語の改善と国語教育の振興に関する施策を普及徹底するために編集するものであります。

このシリーズは、国語問題編・国語教育編・国語生活編および国語教養編として、それぞれ逐次刊行する予定であります。

問題編は主として国語審議会の発表した事がらを、教育編は国語指導の方法などを、生活編は国民の言語生活に関する事がらを解説するものであり、教養編は一般の国語教養を高めることを目的とするものであります。

すでに、教育編では6冊、問題編では5冊、生活編では4冊、教養編では3冊を刊行しています。この本は、問題編の6冊目として国語課で編集したものであります。

国語課では、昭和22年以来、当用漢字・現代かなづかいなどについて、広く各方面から寄せられた質問に対して、そのつどお答えしてきました。それに基づいて昨年「国語問題問答」を刊行しましたが、こんど、その第2集として、この小冊を編集しました。

昭和 29 年 2 月

文部省調査局国語課長 白 石 大 二

目 次

1	読み方・発音について.....	1
2	漢字の使い方について.....	3
3	字体について.....	12
4	筆順について.....	14
5	音のない漢字について.....	15
6	漢字の部首引きについて.....	16
7	漢字の学年配当について.....	18
8	かなづかいについて.....	19
9	送りがなについて.....	21
10	数字の書き方について.....	22
11	横書きについて.....	23
12	新町村名の書き表わし方について.....	26
13	ローマ字について.....	29
14	そ の 他.....	41

1 読み方・発音について

【問】 次の語の読み方を教えてください。

施行 施業 世論 世帯 博士

【答】 施行 「施」は漢音「シ」、呉音「セ」で明治時代にはすべて「セコウ」と読んでいましたが、今では法律でも「シコウ」と読みます。ただし、使う職場によって違うと思いますが。漢字の読み方としては「施工」のばあいは「セコウ」と今日でも通用しています。

施業 「シギョウ」がよいでしょう。仏教用語の「施行」は「セギョウ」です。

世論 「ヨロン」「セロン」の二つの読み方のうち、だんだん「セロン」のほうが優勢になりつつあります。

世帯 「セタイ」です。（「ショタイ」は「所帯」と書きます。）

博士 学位としては「ハクシ」に決っています。

「ハカセ」は昔の文章博士もんじようはかせや今の俗語に使います。

【問】 「蠅」は「はえ」か「はい」か。教科書によってまちまちですが。

【答】 動物学など学術上の用語（いわゆる和名）としては「ハエ」です。

文部省著作の教科書では「ハイ」になっています。

【問】 「詩歌」「富貴」または「富貴」などの読み方をどう説明したらよいですか。

【答】 「当用漢字音訓表」まえがきの「夫婦」などの例によって説明してください。

【問】 「砂鉄」は「さてつ」か「しゃてつ」か。

【答】 「さてつ」が普通です。

2 漢字の使い方について

【問】 当用漢字表の使用上の注意事項について例を示して説明して下さい。

【答】 現行の国語の教科書の類では、だいたい次のようです。ただし、小学校、中学校、高等学校の違いによって、多少の差があります。

- 1 代名詞・連体詞は原則としてかながきにする。(×印は当用漢字表にない字を示す。)

○わたし ぼく きみ おまえ かれ だれ (誰[×])

○ある (或[×]) いわゆる この (此[×]) その (其[×]) わが
ただし、次のような書き方も行われています。

私 彼女

- 2 接続詞・感動詞・助動詞・助詞の類はかながきにする。

○あるいは および また なお (尙[×]) すなわち したがって

○ああ (噫[×]・嗚呼[×])

○…そうです …のようだ …ごとき …たい …べきだ
…してくださる …してみる …しすぎる

○くらい (ぐらい) ながら (乍[×]) など ばかり ほど まで
(迄[×]) とともに のかわりに のとおりに において (於[×])

3 副詞はなるべくかながきにする。

○あたかも（恰）[×] いささか（些）[×] もっぱら じゅうぶん
たいへん ちょうど だいぶ だいたい せっかく ずいぶ
ん さっそく いっしょうけんめい

ただし、次のような書き方も行われています。

全く 常に 必ず 最も 再び 大いに 今

実に 元来 万一 当然 突然 一応 堂々と 平然と 非
常に

割合に 絶えず 夢にも 重ねて

4 接尾語の類はなるべくかながきにする。

○一年じゅう 三人まえ 百回め 十足ぶん …がち …どう
し 十か月

5 外国（中国を除く）の地名・人名はかながきにする。

○イギリス フランス アメリカ ロンドン ツルゲニエフ
リヴィングストン

備考 中国については、「北京」^{ペーピン}のごとく中国現代標準音のふりがなをつけたものと、「徐州」^{じょしゅう}のごとくわが国の字音のふりがなのものとある。

6 外来語はかながきにする。

○ラジオ ノート カーテン ステッキ センチ（糲）[×] メー
トル グラム（瓦）[×] ガス（瓦斯）[×] ガラス（硝子）[×]

7 動、植物の名称はかながきにする。

○いぬ ねこ うし ろば ひつじ りす たか ふくろう
ひばり すずめ あゆ

うめ さくら いちょう くわ しゅろ あさがお りんご
みかん なす かぼちゃ とうもろこし らっかせい さつ
まいも

ただし、次のような書き方も行われています。

竹やぶ 麦畑 麦わら 雌牛 ^{しゅろしゅ} 棕櫚酒

当用漢字表にある動、植物名の字は、主として熟語構成のために入れられたものである。

例 牛 馬 犬 豚 羊 象 鶏 鯨 蚕 松 柳 桑 梅
桜 菊 桃 竹 茶

8 道具などの名称もかながきにする。

○茶わん さじ 油ざら めしびつ こたつ ぞうり くつ
いす ちょうめん ろうそく 本だな 火ばち

9 あて字はかながきにする。

○うらやましい すてき やはり

(熟字訓) きょう ゆうべ ことし すもう おもちゃ へた
いなか おとな ことば

10 当用漢字表・同音訓表で書けるものでも特にながきにする ことが望ましいものがある。

1) 意味が漢字から離れている場合

ほねおる じょうぶ わんぱく りっぱ しばい ぐあい

2) 一語としての意識が強い場合

しくみ ひっぱる あおむく

3) 漢字で書くと誤読されるおそれのある場合

くふう

4) その他

ありさま できごと

11 音訓表になくて書けないので、かながきにするもの(▲印は、当用漢字表に字はあるが、音訓がないものを示す。)

△したく(支度) ▲へや(部屋) ▲しわざ(為業) ▲ひとり(独)
うしろ(後)△つどい(集) ▲すべ(術) ▲はぐくむ(育) ▲いただく(抱)
〔古訓・文語〕

12 当用漢字表にないので、かながきにするもの

○あいさつ あいまい ゆううつ けいべつ ごきげん ほう
たい こじき ほうび だめ れんが○とびら におい かび かきね しる 貝がら かん高い
煮ざかな 麦わら 本だな 火ばち

熟語で一方の字が使えない場合、漢字とかなとをまぜて書く書き方は、現在の教科書にはあまりないが、「ばい菌」のような場合には、全部かながきにするか、漢字を使ってふりがなをつけている。

れい度 ちく音機 小ぞう など。

以上は、従来漢字を使ったものでかながきになった例ですが、逆にどうということばに漢字が使われているかといいますと、名詞・動詞・形容詞・形容動詞（もちろん活用語尾はかながき）などを書き表わす場合、当用漢字表・音訓表の範囲で書けるものは、だいたい漢字を使ってあるわけですが、その中で注意すべきことは、同音の代用の問題であります。

例 熔・鎔→溶 洲→州 智→知 篇→編 聯→連 註→注 礦
→鉍 慾→欲 劃→画 廓→郭 廻→回 托→託 棉→綿
煉・鍊→鍊 稀→希 綜→総 訊→尋 輯→集 附→付
台風 日食（[×]蝕） 総合（[×]綜） 連合（[×]聯） 計画（[×]劃）
台頭（[×]擡） 一獲千金（[×]攫） 意氣軒高（[×]昂） 豪州（齡
→令 歳→才）

最も問題になるのは、当用漢字表や音訓表にはずれたものであります。当用漢字表の注意事項では、そういう場合には、別のことばに言いかえるか、かながきにすることになっていますが、このどちらもぐあいが悪いときには、中学校の国語教科書などでは他人の文章を多くとっている関係上、言いかえはあまりしてないようで、むしろ漢字を使ってふりがなをする方式がとられています。

1 地名・人名

○奈良	かすが	わかくさやま	しなの	むさし
	春日	嫩草山	信濃	武蔵
ひでよし	よしつね	やかもち	なおや	あくた りゅうのすけ
○秀吉	義経	家持	志賀直哉	芥川竜之介
				よし 淑子
				かつら 桂正作

2 学術専門用語

○昆虫 双翅類 甲殻類 禾本科 脊椎動物 臼齒 鷗尾

3 古語

○築地 万華鏡 冠者 二十日 齡 糧 和尚

4 読み紛れやすい語

○上方 来春 漁を仕事に…

5 普通の語

○昂然 放擲 暗澹 親戚 気魄 獐猛 谿谷 眺望 偵察
掠奪 祈禱 酋長 尖端 嚆矢 容貌 斷乎

これらの中には適当に言いかえられるもの、漢字とかなとを
まぜて書いてよいものがあります。

【問】 教育漢字の「読み」の試験をしてみたら、「弑」の字がほと
んど読めなかった。「𢀛」や「弑」は教育漢字として不用では
ありませんか。

【答】 漢字の必要性は、使用ひん度の高低にかかわらず、質的に絶
対必要だというものがあります。「𢀛、弑」の2字はそれです。
ただし、将来、証書面の数詞の表現も、すべて横書きの算用数
字でまかなうようになれば、そのときには漢数字の必要性がほ
とんどなくなり、特に「𢀛、弑」はまったく不用になります。
(古典のほかは)。しかし、それまでは「𢀛、弑」も必要である
というので、教育漢字の中にも採用されたわけです。

【問】「年齢」を「年令」と書いてもよいですか。

【答】「齡」の略字として「令」を「年令」の場合には使っています。

【問】「12歳」を「12才」と書いてもよいですか。

【答】「…歳」という場合の接尾語としては「…才」と書いてもさしつかえありません。それでも実用的にはじゅうぶん「…歳」の意味となるように、現代の社会的通念としては認めています。

【問】メートル法の「粁・𠄎・𠄎」などの字はどう扱ったらよいでしょうか。度量衡の用字としてこの字を用いたいと思うのですが、小、中学校の教科書はどう扱っていますか。

【答】メートル法の「粁・𠄎・𠄎」などの字は、どれも当用漢字表にありません。「メートル・キロメートル」というふうにかたかなで書くか、あるいは m, km, kg, kt の符号を用います。現在の教育では、m は小学2年から、km, kg は3年、kt は5年から教えています。すべて小文字で書き、略符号の「・」などもつけません。

【問】「冒険」と「探険、探検」はどちらが正しいか。

【答】「冒険」と「探検」が正しい。ただし、「探検」は、特に危険をおかして実地を探るというような意味を表わすつもりで、

「探陰」などと書かれることがあります。

【問】「価格」と「価額」は、どちらが正しい用字法ですか。

【答】「価格」です。

【問】「車輛」は「車両」でよいか。

【答】元来は「車両」なのです。「両」の本義は、車の両輪のことです。その「両」にあとから車へんをつけたのです。「車輛」という場合には、前に「車」があるから、車へんはなくてもわかるという意味で、意識的に「輛」の字が制限されたのです。

【問】「批難」と「非難」はどちらが正しいか。

【答】元来は「批難」で、その「批」の字も当用漢字表にあります、が、なるべくやさしい漢字を使うというたてまえからは「非難」でいいと思います。

【問】「排列」と「配列」はどちらが正しいか。

【答】前項と同じ意味で「配列」を使うようにしています。

【問】新設の会社名「〇〇醬油株式会社」を、当用漢字表に従ってつけたいと思いますが、なんと書いたらよいでしょう。

【答】「醬」の字は当用漢字にありません。ついては、

(イ) 正油 (ロ) しょう油 (ハ) しょうゆ この三つの書き方のうち、

(ハ) の「しょうゆ」という書き方がいちばんよいというのが多数の意見です。前後が漢字で、その中に「しょうゆ」というかながきがまじるのは、ちょっとへんなように思えるかもしれませんが、新しい考え方からすれば、目的物が非常に目だって、広告上にも大きな効果があるというものです。

しかるべく御取捨の上、御決定ください。

【問】「ふぜい」はどう書きますか。

【答】 かなで「ふぜい」と書きます。もし、どうしても漢字を使うとすれば、そえがなをします。たとえば

風情 (ふぜい) 風情^{ふぜい}

3 字体について

【問】「童」の字は「立」に「里」と教えてよろしいか。習字の本に「里」の捧が上に突き抜けているのがあります。字原は「立」に「重」であるから、その点からはそれが正しいと思われますが。

【答】「童」は、字原にかかわらず、現行の規範的字体としては「立」に「里」です。

ただし、芸術書道としては古来の伝統・習慣もありますから、そこに多少のゆとりをもって見なければなりません。

【問】「冷」の字体について、教科書活字がまちまちである。

【答】明朝活字では「冷」ですが、筆写体では「冷」と書くのが普通です。（それは書きやすい形に自然になったのです）。それで、教科書体では筆写体の形によるようになっています。

【問】「夢」の字体は新旧で違いますか。あわせて筆順もお尋ねします。

【答】 違います。

「夢」は「𠂇𠂇𠂇夕」の構成で、筆順もそれに従います。これが基準です。

ただし、早書きには「一「口」一「マ」タ」の筆順でも書きます。

字体表は「クサカシムリ」の「タテカク」と「𠄎」の中の「タテカク」とが一直線に見えますが、基準としては上記のように「サ𠄎」の構成であると解釈しています。大字ではそれがよく表われます。

【問】 旧字体は誤りとすべきであるか。

【答】 旧字体を誤りとするかしないかは評価の際の約束しだいです。新字体によるときは、書取考査の前に、答は新字体で書くという約束を新たにしておくだけの親切がほしいと思います。作文の中で書いているのは、誤りとししないで、注意を与えて、しだいに新字体に向かわせたいと思います。

【問】 新聞の活字が、大小によって字体がまちまちである。

【答】 新聞の活字を各号にわたって全部新字体にすることは、実際には予想以上に進んでいるのが現状です。

文部省としては、経済上の問題があるので、なるべく早くという希望で、機会あるごとに協力しています。

4・筆順について

【問】 漢字の筆順が、人によってまちまちで困っています。教科書についているのもずいぶんまちまちです。筆順として一定した基準はないのでしょうか。

【答】 すべて仕事には手順というものがあり、手順がよいと仕事のできもよい。筆順も、字を正しく、速く、美しく書く上の手順であって、必要なものです。そして、だいたいにおいて、古来、自然に一定した筆順があります。ただし、一字で二つ（まれに二つ以上）の筆順が行われているものも少しはありますが、それは例外です。

【問】 新旧字体の違いによって筆順が変わってもよろしいか。

【答】 当然変わるものがあります。

5 音のない漢字について

【問】 当用漢字音訓表に、訓ばかりあって音のない字があるのは、
どういうわけですか。

【答】 この類の字が 30 字ありますが、それは、漢字としては音があっても、日本語で音に使うことがまったくない、あるいは少ないので、そういう字は、音をはぶいて、訓ばかりを使うことにしたのです。たとえば、

扱 あつかう （漢字としては「キュウ」という音がある。）

芋 いも （漢字としてはウの音がある。）

峠 とうげ （漢字としては音がない。）

込 こむ （漢字としては音がない。）

【問】 漢字として、音がないのはどういうわけですか。

【答】 ひとくちに、日本でこしらえた字だからといわれています（それで「国字」と呼ぶ）。しかし、はたして全部が全部そうであるかどうかは、学問上では疑問の点があります。

6 漢字の部首引きについて

【問】 漢字の部首引きで、むずかしいものの例を示してください。

【答】 相当に多いのですが、そのうちで数例をあげておきます。

九 (現在「乙」の部にある)

世 (〃 「一」 〃)

以 (〃 「人」 〃)

冒 (〃 「冂」 〃)

勝 (〃 「力」 〃)

卒 (〃 「十」 〃)

吏 (〃 「口」 〃)

奉 (〃 「大」 〃)

弟 (〃 「弓」 〃)

才 (〃 「手」 〃)

承 (〃 「手」 〃)

愛 (〃 「心」 〃)

求 (〃 「水」 〃)

頼 (〃 「貝」 〃)

【問】 新字体になって、少しも手がかりがなくなったのがあります。

新しい部首引きはまだ決まりませんか。

【答】 研究中です。

新部首を決定して、これからの字典はそれによるということにするのには、慎重に考えなければなりません。現実の教室で、へんやつくりによって並べるような場合に、必ずしも従来の字典の部首による必要はなく、たとえば、和（字典では「口」の部）でものぎへんで集めてよく、そして、旧来の字典の引き方として、上級になって別に考えればよいわけです。

7 漢字の学年配当について

【問】 漢字の学年配当は厳守すべきであるか。

【答】 小学6年，中学3年の計9年が義務教育の期間です。その間に，社会に出てから必要不可欠と思われるだけの漢字を修得させることが目標です。この意味で，低学年から漢字を厳格に割り当てて，その記憶を厳重に要求することは，あまりに児童の先天的能力および学習能力発達の個人差を無視したものであると思います。一般に低学年では「ことば」の理解と表現の能力（それは「かな文」で可能である）の訓練を主とすべきであり，それに適当に漢字をあてて書くことは第二次的な作業として，漸進的に進めてよいと思います。ことばの上の敬語や表記上の漢字の適用などは，すべて修辭面のことですから，その修辭面の早期強要から，児童の表現意欲を委縮させてはならないと思います。

8 かなづかいについて

【問】「オーイ」という呼び声は「おおい」か「おうい」か。

【答】普通のことばの長音は、エ列の長音もオ列の長音も、すべて「あ、い、う」の3母音字で表わしますが、感動詞は、とくに昔から「あ、い、う、え、お」の5母音字をすべて使って表わします。たとえば、

ああ いいえ ふうん ええ おお おおい

古典の例では、たとえば、

後から「おおい、おおい、^{いなか}田舎者、返せ、返せ」と申して

(狂言記 大日本国語辞典)

とあり、現行の教科書では多くは「おうい」となっていますが、どちらに書いても誤りではありません。

返事の「おお」も、古典に「おお」「おう」両方の用例があります。たとえば、

おお、それよ。人の話に聞きおきし、

(西鶴，加古教信土墓廻，大日本国語辞典)

おう、それ、それ。その伊勢本，伊勢本。

(狂言記，いの字，大日本国語辞典)

【問】「大阪」を「おおさか」と書くよりも、むしろ「おうさか」と

書くことに統一してほしい。

【答】 一つの希望意見としてはもっともなことです。現行の規定では「おおさか」です。

【問】 「ぢ、づ」の例外の書き方は、固有名詞にも適用しますか。

次の地名の新かなづかいをお尋ねします。

【答】 現行のきまりでは――

1. 適用します。
2. 舞鶴 会津 国府津 浅芽が原

【問】 よう音（わたる音）の「や、ゆ、よ」を、ルビでも小さくすべきではないか。

【答】 ルビでも「や、ゆ、よ」「つ」を小さくすることは、原則としてはそうですが、実際にはむずかしい点がありましょう。

そこで、これは指導の上で注意を与え、そのつもりで読むことを教えるのが、現下の処置であると思います。

9 送りがないについて

【問】「すくなくない」は、「少くない」と書くのがよいか、「少なくない」と書くほうがよいですか。

【答】読み誤りが少ないように、「少なくない」と書くほうがしだいに普及してきています。したがって、「すくない」も「少ない」と書くのがよいでしょう。

10 数字の書き方について

【問】 横書き文における 日付の書き方について、たとえば、 $4/5$ か $15/4$ かは一定していますか。

【答】 横書きでは、昭和29年1月15日のように書きます。場合によって（たとえば、表など）は、昭和29. 1. 15のように書いてもよいことになっています。また、表などに、 $4/5$ 、 $15/4$ のように書く場合は、その用いる所の習慣で一定はしていませんが、普通 $4/5$ のように書かれています。

【問】 左横書きの場合における、算用数字と漢数字との書き表わし方について、現在ではどういうきまりになっていますか。

【答】 左横書きの場合、数を表わす場合はアラビア数字を用います。たとえば、

3,956 円, 26 本, 105 回

ただし、一部分の意味のときの「一部」、「一般に」、「三日月」などには漢字を用います。

また、概数を示す場合も漢字を用います。たとえば、

四、五日, 五、六万, 数十日

数を表わす場合でも、「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ…」と読む場合は漢数字を用います。

11 横書きについて

【問】 縦書きの法令を，横書きの文の中に引用する場合，横書きに直して用いてよいですか。

【答】 横書きの文の中に，縦書きの法令を引用する場合は，横書きに直して用います。

【問】 文書を横書きにすることの利点はどういうところにありますか。

【答】 だいたい次のような点です。

1 書きやすい。

現代の実務に用いられるペン・鉛筆・鉄筆の書法では，うでを浮せないで書くため，縦書きよりも横書きのほうがずっと書きやすい。これに対して横書きでは続け書きができないという反対論があるが，事務用文書は，できるだけ相手に速く読めるものを書くべきであるから，草体の続け書きはむしろ禁ずべきであり，その点でも横書きのほうが有効だということができる。

2 書いた跡をこすらないですむ。

インキやカーボン紙を用いる場合，横書きならば書いたあとをこすらないですむから，手や文書がよごれない。謄写版の原紙を書く場合には書いた部分が手の熱で溶ける心配もない。

3 書き終った部分が見える。

横書きでは書き終った部分が見えるから、前の部分を見ながら次々とあとの文案を考えて行くことができる。

4 数式・ローマ字の書き方と一致する。

現代の文書には、数式やローマ字を入れることが、しだいに多くなってきつつあるから、この点でも横書きが便利である。

5 用紙の節約になる。

一般的に往復文書は、本文にはいる前に文書番号、年月日、発信者名、受信者名、件名などに各1行ずつを必要とする。横書きをすれば、縦書きのときよりも1行の字数が少ないから、この部分の余白が著しく節約できる。箇条書きや、段落の多い文章ではいっそうである。それに伴って用紙の使用量も少なくなるから、書類をつづりあわせる手数や消耗品の上でも多く節約ができる。

6 つづりこみを統一することができる。

設計図、統計書、会計関係書類、欧文などの文章といっしょにする際便利である。

7 書類を参照するときめくりやすい。

右手にペンを持ちながら左手で書類をめくることができるから能率的である。

8 検出しやすい。

縦書きの文書では、文書番号・発信者名・件名などは、通常

とじ目のほうに近く書かれるので検出に不便であるが、横書きでは、端のほうに書かれるので、つづりの中から必要書類を検出するのにつづりがよい。

9 読みやすい。

読む上の優劣については、縦書きに慣れた者にとっては横書きは最初いくらか読みにくいだが、慣れれば縦書き以上に読みやすい。実験結果からいっても、縦書きよりも横書きのほうが読みやすいという報告は出ているが、その反対の報告はまだ出ていない。

12 新町村名の書き表わし方について

【問】 新町村名のことについて、国語審議会から建議されたそうですが、その全文を示してください。

【答】 次のとおりです。

町村の合併によって新しくつけられる地名の書き表わし方について

(内閣総理大臣あて建議)

政府では、こんど全国の町村の合併を促進されることになったと承っています。ついては、この機会に、別紙の趣旨をお含みのうえ、合併後の市町村名の書き表わし方が、できるだけわかりやすく、読みちがいの起らないようなものに決定されるよう、適当な処置をとられることを希望いたします。

地名の漢字については、国民生活一般に影響することが大きいので、当用漢字表選定の際にもいちおう問題となりましたが、法規その他の関係上その解決は後日に見送られることになって今日に至りました。しかし、すでに当時から7年を経過した現在、当用漢字表制定の趣旨も広く一般に理解されるようになってきました。ちょうどこのとき町村の合併が行われるということは、地名の文字をわかりやすいものにするうえに、またとないいい機会であると思います。よって、ここに建議いたします。

別紙

1 むずかしい漢字が用いられている例

長崎県の豆段（ツツ）村， 鹿児島県の穎娃（エイ）町
宮城県の中埜（ナカゾネ）村， 石川県の羽咋（ハクイ）村
山梨県の綱原（ユズリハラ）村， 岡山県の砦部（アザイ）町

2 文字はやさしくても，読み方のむずかしい例

和歌山県の学文路（カムロ）村， 愛知県の拳母（コロモ）市
京都府の間人（タイザ）町， 茨城県の行方（ナメカタ）村
ことに北海道にはこの種の地名が多い。

神戸は 兵庫県では コウベ， 三重県ではカンベ
鳥取県では カンド， 岡山県ではジンゴ
東京都では カノト，

そのほかコウトとかゴウドと読む地名が各地にある。

3 地名の書き方を平易にした例

長野県「茅野町」は「ちの町」とかな書きにした。東京都では区を合併した際「飛鳥区」「春日区」などの案を退けて，「北区」「文京区」とした。

4 教育上

むずかしい漢字，むずかしい読み方の地名は，むかしから学習上非常な負担となっていたが，今後も，教育上に大きな不便を感ずる。

5 通信・ラジオ・交通・事務上

地名のむずかしさは、通信・交通・事務の上に手違いを起させる、ラジオなどで地名を聞いても、理解することができないことがある。文化の発達に伴い、この問題の解決の必要が切実に感じられる。

6 印刷上

地名にむずかしい漢字があるために、使用度の少ない活字を数多く備えなければならないし、活字を拾うためにも手数がかかり、印刷能率の向上に支障をきたしている。

7 むすび

以上のようなわけで、全国の地名の中には、書き表わし方をできるだけ早く改善する必要のあるものが多い。とりあえず、こんどの合併によって新しく決定される市町村名について、この点につきじゅうぶんの考慮を払われることが適當であると考ええる。

13 ローマ字について

【問】 国語審議会では、ローマ字のつづり方を単一化しましたが、小学校・中学校で行うローマ字の学習指導はどのようにになりますか。

【答】 これについては、昭和28年8月31日付で、初中局長・調査局長から、教育委員会等にあてて通達されていますので、次にその全文を掲げておきます。

文 初 初 第 568 号

昭和 28 年 8 月 31 日

各都道府県教育委員会
各 都 道 府 県 知 事 殿
各教員養成大学(部)長

文部省初等中等教育局長
緒 方 信 一
文 部 省 調 査 局 長
小 林 行 雄

小中学校のローマ字学習について (通達)

これまで小中学校のローマ字学習におけるつづり方に関しては、いわゆる訓令式・日本式・標準式(ヘボン式)のうち、そのどれかにより、どの式によるにしても、他の二式についての知識をあわせて得るようになっておりましたが、このたびその単一化をはかり、別記の第1表(そえがきを含む。)をそのよりどころとし、第2表(そえがきを含む。)についての知識もあわせて学習させることにしました。その指導実施の時

期方法等については別記をじゅうぶんど参照の上、学習上混乱をおこさないようにご配慮ください。なお、参考資料として国語審議会の建議を添付いたします。ついては、この件に関し貴管下各市町村教育委員会（小中学校付属小中学校）へ周知方をお願いします。

別 記

1) ローマ字のつづり方

第 1 表

第 2 表

そえがき

2) 実施の時期

(イ) 学習指導について

(ロ) 教科書について

3) 昭和 28 年度，昭和 29 年度における取扱

4) 学習上混乱をおこさないための注意

別記

1)

ローマ字のつづり方

国語のローマ字つづり方は第1表による。

ただし、第2表のつづりを用いてもよい。

第 1 表

〔 () は重出を示す 〕

a	i	u	e	o			
ka	ki	ku	ke	ko	kya	kyu	kyo
sa	si	su	se	so	sya	syu	syo
ta	ti	tu	te	to	tya	tyu	tyo
na	ni	nu	ne	no	nya	nyu	nyo
ha	hi	hu	he	ho	hya	hyu	hyo
ma	mi	mu	me	mo	mya	myu	myo
ya	(i)	yu	(e)	yo			
ra	ri	ru	re	ro	rya	ryu	ryo
wa	(i)	(u)	(e)	(o)			
ga	gi	gu	ge	go	gya	gyu	gyo
za	zi	zu	ze	zo	zya	zyu	zyo
da	(zi)	(zu)	de	do	(zya)	(zyu)	(zyo)
ba	bi	bu	be	bo	bya	byu	byo
pa	pi	pu	pe	po	pya	pyu	pyo

第 2 表

sha	shi	shu	sho
		tsu	
cha	chi	chu	cho
		fu	
ja	ji	ju	jo
di	du	dya	dyu
kwa			
gwa			
			wo

そ え が き

前表に定めたもののほか、おおむね次の各項による。

- 1 はねる音「ン」はすべてnと書く。
- 2 はねる音を表わすnと次にくる母音字またはyとを切り離す必要がある場合には、nの次に'を入れる。
- 3 つまる音は、最初の子音字を重ねて表わす。
- 4 長音は母音字の上に^をつけて表わす。なお、大文字の場合に母音字を並べてもよい。
- 5 特殊音の書き表わし方は自由とする。
- 6 文の書きはじめ、および固有名詞は語頭を大文字で書く。なお、固有名詞以外の名詞の語頭を大文字で書いてもよい。

2) 実施の時期

(イ) 学習指導について

- ・ 昭和30年度から下記の趣旨によって実施されることとなる。(ただし学習指導の目標・方法などについては何らの変更もない。)

- (a) ローマ字のつづり方は現在一般社会においては、いろいろの方式のものが用いられているが、ローマ字の学習指導においては、第1表に掲げるもの(そえがきを含む。)を、そのよりどころとする。

〔参考:現在行われているローマ字教育は、つづり方については、いわゆる訓令式・日本式・標準式(ヘボン式)のうち、どれによってもさしつかえないことになっているので、現行の「小学校および中学校・高等学校学習指導要領(国語科編)」には、よりどころとすべきつづり方については、特に明示されていない。〕

- (b) 第2表に掲げるつづり方(そえがきを含む。)によるローマ字文も読むことができるようにする。

〔参考:現行の「小学校学習指導要領(国語科編)」には、「ほかの式のつづり方のローマ字をも読むことができる。」とある。〕

- (c) 第2表に掲げるつづり方(そえがきを含む。)によるローマ字文を読めるようにするには、まず第1表に掲げるつづり方によるローマ字文にじゅうぶんに慣れてから始めるようにする。

〔参考:現行の「小学校学習指導要領(国語科編)」には「ほかの式のつづり方のローマ字文を読めるようにするには、まず、一つの式にじゅうぶん慣れてから始めるようにすべきである。」とある。〕

(ロ) 教科書について

昭和30年度においては、前記通達の趣旨にもとづいた教科書が検定発行される予定である。

3) 昭和28年度、昭和29年度における取扱

昭和28年度の残りの期間、および昭和29年度においては、これまでどおり実施することを原則とする。

4) 学習上混乱をおこさないための注意

ローマ字による国語の書き表わし方と現代かなづかいによる国語の書き表わし方とは、それぞれ独自の体系に基いて、決められているもので、両者の間で一致していない点は、連濁・連呼の場合の書き表わし方ばかりでなく、助詞・長音・よう音・つまる音の書き表わし方などにも見られるから、その点をはっきりさせ、それぞれの体系において指導すべきである。

参 考 資 料

昭和28年3月12日

文部大臣 岡 野 清 豪 殿

国語審議会会長

土 岐 善 麿

ローマ字つづり方の単一化について

(建 議)

ローマ字のつづり方については、昭和12年の内閣訓令第3号（いわゆる訓令式）によって、公式に単一化されているわけであります。しかし、一般社会で現実に用いられているつづり方としては、いわゆる標準式（ヘボン）・日本式・訓令式の3種があり、昭和22年から実施された義務教育におけるローマ字の学習指導でも、この3式の中から自由に採択することができるような処置がとられました。

ローマ字のつづり方については、ローマ字の学習指導実施についての対策を協議するため、昭和21年に設けられたローマ字教育協議会では、「ローマ字教育を行ふについての意見」をまとめ、その中で、「……ローマ字の表記法（特につづり方）については、……さらに適當の機関を

設け、学術上・教育上および実際生活上から研究を進め改善をはかられたきこと。」と述べてあり、教育の現場からはつづり方の単一化が強く要望されております。

国語審議会は、国語を書き表わすローマ字のつづり方の単一化をはかることが重要な事からであることを認め、昭和23年10月に設置された「ローマ字調査会」以来の審議事項を引きつぎ、通計54回に及ぶ会議で慎重な審議を重ねた結果、昭和28年3月12日第18回総会において別紙のとおり「ローマ字のつづり方」を決定しました。

第1表・第2表の具体的な取扱についてはさらに必要な機関と連絡して御決定のうえ、ローマ字の単一なつづり方が政府部内および義務教育はもちろんひろく一般社会に用いられるよう必要な処置をとられることを要望します。

「ローマ字のつづり方」

ま え が き

国語のローマ字つづり方として広く行われている方式には、それぞれに根拠、特色および歴史があり、いずれのつづり方にもわかにその使用を無視することはできない。

しかしながら、国語教育の上や公式の文書、地名などに用いられる場合には、おのずから一定のよりどころがなければならない。この「ローマ字のつづり方」の第1表は、すなわちそのよりどころの役をなすものである。

ただし、第2表によるつづり方も現実には通用しているのであるから、その読み方もまた教育の適当な時期において習得されなければならない。

なお、そえがきは、書き表わし方のうちのおもなきまりをあげたものである。

(「ローマ字のつづり方」の表は、別記(1)のとおりであるから略す。)

なお、この通達の趣旨について、簡単に補足しておきます。

1 実施の時期

昭和30年度から、各学年ともいっせいに実施されることになります。これは、現在行われているローマ字の学習指導は、つづり方を単一化しても、学習指導の目標・方法などはなんら変わるわけではありませんが、趣旨の徹底を期し、また、各方面に及ぶさしざわりができるだけ少ないように配慮した上で、効果的に行われるように考慮されたものです。

2 第1表のつづり方について

第1表のつづり方は、実質的には現在のいわゆる訓令式のつづり方と同じものであります。このつづり方を用いてローマ字文を書き表わす場合には、「そえがき」を適用するのですが、これは、現行教科書の訓令式による書き表わし方と同じです。

3 第2表のつづり方の取扱について

第2表は、徒来のいわゆる標準式（ヘボン式）・日本式のつづり方のうち、第1表に含まれているつづり方と異なっているつづり方を一まとめにしたものです。

4 教科書

昭和30年度から使用する新教科書は、この通達の趣旨に基づいて検定・発行されるわけですから、昭和29年度の教科書展示会には、これらの教科書が展示されることと思います。

5 学習上混乱を起さないための注意

これについては、現代かなづかいによる書き表し方と、ローマ字による書き表し方との間における違い、また、入門学年においていわゆる標準式（ヘボン式）・日本式つづり方で指導を行っていた学級で、第2年度、あるいは第3年度から新しいつづり方による指導を行おうとする場合について考えていただきたいのですが、詳しいことは、次の問答を御覧ください。

【問】 現代かなづかいの書き表し方と、第1表のローマ字による書き表し方との間に一致しない点があり、また、途中でつづり方が変わるために、学習上混乱が起るようなことはないでしょうか。

【答】 現代かなづかいでは、いわゆる連濁・連呼によって生じた〔ジ〕〔ズ〕の音は、「ぢ」「づ」のかなを用いて書くのですが、第1表のつづり方によれば、この場合にも *zi*, *zu* と書きます。〔たとえば、*mikazuki*（三日月）、*tizimu*（縮む）など。〕すなわち、ローマ字による書き表し方と、現代かなづかいによる書き表し方とが一致していない点をやかましくいい、ローマ字の書き表し方を、かなの書き表し方に合わせるべきだという主張もありますが、もともとこの両者はそれぞれ独自の体系に基いて決められていますので、両者の一致していない点は、単に連濁・連呼の場合だけでなく、次に掲げるような点

においてもその不一致が見られるのです。

	現代かなづかいによる書き表わし方	ローマ字(第1表)による書き表わし方
長 音	おおきいわねえ	ôkii wa nê
	おとうさん	otôsan
	そうしましゅう	sô simasyô
	ぎゅうにゅう(牛乳)	gyûnyû
よ う 音	さんみゃく(山脈)	sanmyaku
	しゅるい(種類)	syurui
	あるでしゅう(有るでしゅう)	aru desyô
つ ま る 音	がっこう(学校)	gakkô
	いっしょに	issyoni
	マッチ	matti
	にっぽん(日本)	Nippon
	あっと(叫ぶ)	a'to (sakebu)
	すうっと(消える)	sû' to (kieru)
助 詞 「は」「を」 をへ	本 <u>を</u> 読む	Hon <u>o</u> yomu.
	それは本 <u>です</u>	Sore <u>wa</u> hon desu.
	うちへ <u>帰</u> る	Uti <u>e</u> kaeru.
そ の 他	げんいん(原因)	gen'in
	きんようび(金曜日)	kin'yôbi
	いちじさんじゅうぷん(1時30分)	1-zi 30-pun *

* (数字を使う場合には、つなぎ[-]を入れる。)

ローマ字で、ことばなり、文なりを書き表わすのは、かな文字によって書き表わす個々の音節を一つずつ、ローマ字に翻字したものを組み合わせていくのではないのです。ローマ字文の書き方には、ローマ字文としての独立した書き表わし方の約束・体系があって、それに従って書かなければなりません。

この点をよくのみこんで指導にあたられれば、現代かなづかいとローマ字との書き表わし方が合致していないことから、ひき起すかもしれないといわれている混乱は、じゅうぶんに防ぐことができます。

次に問題となるのは、ローマ字学習の第2年度、あるいは第3年度から、この通達の趣旨によって、第1表のつづり方で指導する場合、それまで、いわゆる標準式（ヘボン式）・日本式のつづり方によって指導していた学級でつづり方が変るために混乱を生じるようなことはないかと心配される向きもあることです。

現行の制度（つづり方については、各学校で、3式のうちから自由に採択できる。）では、転学や中学校へ進学した際などに、つづり方が変ったために、混乱が起った例があるといわれています。これは、そのような場合に、適当な処置（補修教育）を行わなかったためであると思われますから、たとえば次に述べるような処置をとれば、このことは未然に防げるでしょう。

（a） 日常よく使われることば、児童が見慣れていることばで、つづり方が違うことばを選び、両方を板書して、同じ読み方・意

味であることを説明する。

(b) 第1表のつづり方による一目読みのカードを使って、(a)で指導したことばについて、一目で読み取ることの練習をする。

(c) 各音節の違いを抜き出して示す。

(d) 第1表のつづり方による、やさしい短い文を読ませる。

以上のようなことを、この順序で児童がほぼ習熟したと見きわめがつくまで行うのです。

なお、念のために申し添えておきますが、昭和29年度は従来どおりに実施することが原則となっています。

14 そ の 他

【問】 旧法令の一部改正を実施するときは、従来どおり文語体で改正するのですか。

【答】 「公用文作成の要領」(昭和27.4.16 内閣閣令第16号 依 命 通 知)の中の、
第1 用語用字について——3 法令の用語用字について——に、
次のようにあります。

(1) 法令の一部を改正する場合について

1 文語体、かたかな書きを用いている法令を改正する場合は、改正の部分が一つのまとまった形をしている場合は、その部分は口語体を用い、ひらがな書きとする。

(「公用文作成の要領」参照。)

【問】 新聞など、日本の文章を、すべてかなで書くことにはならないでしょうか。

漢字は使っても、ごく少数にしてほしいと思います。

【答】 かな本位にするというようなことは別として、むずかしい漢字はなるべく避けて、わかりやすい文章を書くことが、いちばんたいせつなことです。

古く、日本の文章は、漢字ばかりの漢文(または漢文まがいの文——たとえば^{そうつろ}候文など)が正式の書き方として認められて

いましたが、だんだん今日のようにわかりやすい口語文になってきたのです。これからも、一步一步、進んでいくように文部省でも努力しております。その実行の方途としては、第一に、これまで無制限であった漢字を当用漢字の 1850 字と制限し、なおその中から教育漢字の 881 字に近づけていくように努力しています。このことは国語審議会の一貫した方針です。

第二には、これまで読み方が無制限であったのを当用漢字音訓表のように制限しました。

第三に、画数の多い字は、当用漢字字体表のように簡単にしました。たとえば「廳」は「庁」というふうです。

以上のようなしだいですから、今後いっそう御協力を願います。

【問】 終戦後、小学1年から**ひらがな**本位とすることになったのは、
どういうわけですか。

【答】 新憲法の口語文体に伴って、その用字もひらがな本位となり、法令その他いっさいの公用文もひらがなになったので、ここに一応日本文がひらがな本位に統一されました。教育は社会の実態に即して行われるべきですから、それと順応して小学1年の教科書からひらがなにしたわけです。これによって、児童読み物の問題も一応解決したわけです。

【問】 ひきしまった文章にするために、口語体の文中に文語調をまぜて使うことは、さしつかえないでしょうか。

【答】 口語体の文章と、文語をまぜて使うことは、必ずしも排斥すべきだとは思われませんが、文語ふうにすればその文章がひきしまったものに必ずなるとは限りません。かえってぎこちないものとなってしまう場合が多いようです。口語体の文章でも、くふうとことばの使い方でひきしまった文章になります。

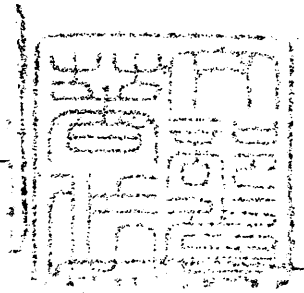
【問】 アクセントは、どんな心構えで指導したらよいでしょうか。

【答】 アクセントは、いっさいの読み・発音に伴っているものですから、国語教室でも早晚ふれるようになるでしょう。しかし、それを低学年からあまりやかましく言うと児童の「発言」に対する気はくをそぐおそれがありますから、その点に注意して、まず先生が研究してくださることが望ましいと思います。

MEJ 4060

国語問題問答(第二集)

定価 ㇿ 25.00



昭和二十九年十月一日印刷
昭和二十九年十月二十日発行

著作権所有 文 部 省

発行所 東京都千代田区神田小川町一ノ一 光風出版株式会社

代表者 竹田光二

印刷者 名古屋市昭和区白金町二ノ八 竹田印刷株式会社

代表者 福寿米吉

発行所 光風出版株式会社

東京営業所
名古屋営業所

東京都千代田区神田小川町一ノ一
電話 三三七七〇番
振替口座 東京一六二五九番
名古屋市中区白金町二ノ八
電話 二一五八六番
振替口座 名古屋三八二五三番